

## 正心誠意

この言葉、久しぶりに目にしました。

耳で聞くと「誠心誠意」と同じに聞こえますが、意味するところは随分違います。

「誠心誠意」は、偽りのない心、真心という意味ですが、「正心誠意」の方は、心を正しくし、真心を持って、ということになるのでしょうか。

野田総理大臣は、先日行われた所信表明演説の中で、「政治に求められるのは、いつの世も正心誠意の4文字があるのみだ」と述べられました。

この総理の発言について、好感を持って受け止めた方も多いように思います。

確かに、この数年間の政治状況をみると、党利党略、政局に明け暮れ、特に、東日本大震災の対策も遅々として進まない状況の中、総理の発言は、気持ちを一つに課題に取り組みたいという思いの表れだと思います。

ただ、私は、いちいち言葉尻を捉えて批判するつもりは毛頭ありませんが、「正心誠意」が何を意味するのか実は良く分かりません。

例えば、国民の反対が予想されることでも、逃げずに説明責任を果たしていくということなら「誠心誠意」という言葉の方が相応しいと思います。

「正心」つまり心を正しくするということになると、何を持って正しいと判断するのかという問題が生じます。様々な政治的な課題に直面したとき、一つの判断を「正しい」とするか「正しくない」とするかは、人によって異なるからです。

「正心誠意」という言葉は、総理が勝海舟の晩年の語録をまとめた「氷川清話」の一文を引用したといわれています。

勝海舟は、幕臣でありながら幕府より日本の行く末を第一に考えた人ですが、「氷川清話」の中で、政治家の秘訣として、ただただ「正心誠意」の4文字ばかりであるとし、幕臣として正心誠意勤めてきたと述べています。これに対し

て、同じ幕臣であった福沢諭吉は、戊辰戦争で抵抗せず江戸城を明け渡したのは、三河武士の精神に背き、日本国民固有のやせ我慢という立国の大本を害するばかりでなく、明治新政府の要人として使えたことは理解に苦しむと批判しています。

私は、勝海舟が命がけで江戸城の無血開城を成し遂げたことで、日本は、欧米列強に浸食されず、近代化への道を進むことができたのではないかと考えており、その功績は極めて大きかったと思っています。しかし、こうしたことに対して、否を唱える人がいるのです。

つまり、「正しい心で」といっても客観的な判断基準があるわけではありませんから、結局は自分の信念に従うことが「正しい心」ということになるのだと思います。

勝海舟は、福沢諭吉の批判に対してこう返事を出しています。「行蔵は我にあり、毀誉は他人の主張。我に与らず、我に関せず。」自分がなしたことの責任は自分にあり、それをどう評価するかは与り知らぬこと、ということです。

今、総理は平身低頭して、野党の協力を得ようとしています。勝海舟は「窮屈逼塞は、天地の常道ではない。」とも述べています。

今の政治に求められるのは、国民に対して国として進むべき道をしっかりと示すと共に、ぶれずに、逃げずに、説明責任を果たしながら、合意形成に向け「誠心誠意」努力することではないでしょうか。（塾頭 吉田 洋一）